

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第16集

羽黒平（3）遺跡発掘調査報告書

—「美人川再生事業」に係る緊急発掘調査—

平成16年度

浪岡町教育委員会

序

浪岡町は、中世城館である「浪岡城跡」をはじめとして、中世の遺跡や民話・伝説が数多く残っていることから、「中世の里なみおか」を地域の特色としてまちづくりに活かしてまいりました。

このたび、その一環として五本松地区に残る町指定文化財の「楊枝杉」と「羽黒神社」、「美人川伝説」を活用した「美人川再生事業」を実施することになりましたが、事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「羽黒平(3)遺跡」の一部であったため、記録保存を行うために発掘調査を行ったものです。

羽黒平(3)遺跡は青森県立郷土館収蔵の「風韻堂コレクション」の収蔵品や町指定文化財の「立ち膝をする土偶」など縄文時代晩期の優れた資料が発見されたことでも知られている遺跡であるため、事業により地下の遺構や遺物に影響が生じる危険性がある個所について、平成6年度から8年度までの3年間をかけ発掘調査を行いました。

調査により、縄文時代晩期を中心平安時代や中世まで幅広い時代の遺物や建物などを確認できたことから、長く人々が暮らしてきた場所として、浪岡地区の歴史の一助となる成果が得られたと考えております。

教育委員会では、今後も、調査や文化財の保護・保存などを進めてまいる所存です。関係各位に於かれましては、旧に倍しての御力添えをお願い申し上げます。

最後に、ご指導・ご協力を賜りました皆様に記して感謝の意を表するものであります。

平成17年3月

浪岡町教育委員会
教育長 錦田 慎也

例 言

- 1 本書は、平成7～8年度に浪岡町の「美人川再生事業」に伴い、浪岡町教育委員会が実施した羽黒平(3)遺跡の緊急発掘調査にかかる発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集並びに執筆は木村浩一が担当した。
- 3 本報告書の土層の注記については、『新版標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄 1993)に準拠し、基本層序及び検出遺構の土層観察表は、巻末に一括して示した。
- 4 掘図の方位、縮尺は図ごとに異なる。各種遺構平面図の方位記号は磁北を示すものとし、挿図、写真図版の縮尺は統一を図らないため、図ごとにスケールを表記した。
- 5 本文中の計測値の表記において、調査区外や削平等により未確認な場合は（ ）でくくり示した。
遺物計測値においても同様の扱いとし、破片等測定ができない物は確認できた数値を（ ）でくくり示した。
- 6 遺物番号は個体ごとに番号を付し、文中では（ ）内に示した。
- 7 出土遺物及び記録図面等並びに写真関係資料等は、浪岡町教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査の実施にあたっては、調査対象区周辺の地権者の方々をはじめ、多くの方々のご協力をいただいた。また、報告書の作成にあたり、発掘調査顧問からのご教示・ご指導を賜わった。
ここに深く感謝の意を表する次第である。
- 9 本報告書で「概報」とあるものは、平成6年度に行った「羽黒平(3)遺跡発掘〔試掘〕調査報告書」を示すものである。

目 次

序

例言・目次

第1章 調査にいたる経緯	1
第2章 検出遺構	6
第3章 出土遺物	20
第4章 まとめ	71
出土遺物計測表・遺構土層注記表	72
発掘調査抄録	82
写真図版	83

第1章 調査に至る経緯（平成7年3月刊 羽黒平（3）遺跡発掘[試掘]調査報告書から抜粋）

浪岡町には国指定史跡浪岡城跡をはじめとする、多くの埋蔵文化財包蔵地が所在し、まちづくりのキヤッヂフレーズを「中世の里」とするなど、歴史的遺産がいたるところに存在する。

今回調査対象となった羽黒平（3）遺跡に関しては、今回の調査地である丘陵上から浪岡川により一段低くなる河川氾濫原の現水田地については、昭和32年頃に町の有識者によって発掘調査がなされ、昭和33年1月から5月までの「広銀行丘（みなおか）」にて計4回にわたって発掘調査の写真や出土遺物の写真が掲載されている。現在残されている遺物などを見ると、縄文晩期大洞C1式を中心とする泥炭地遺跡であったと推定される。

なお、調査地に接する羽黒神社は「美人川伝説」の擬定地であるとともに30年以上前に湧き水の池から龍神が現れたという神社であり、現在、境内には龍神様・十和田様・山の神様・二十三夜様・羽黒権現様が祭られており、毎年4月19日には祭礼日となり、毎月19日には近隣の人々が参拝に訪れている。本調査にあたっては、そのような歴史的経緯を考慮して、縄文晩期を中心とする遺構・遺物発見に努めるよう以下の発掘[試掘]調査要項によって実施することになった。

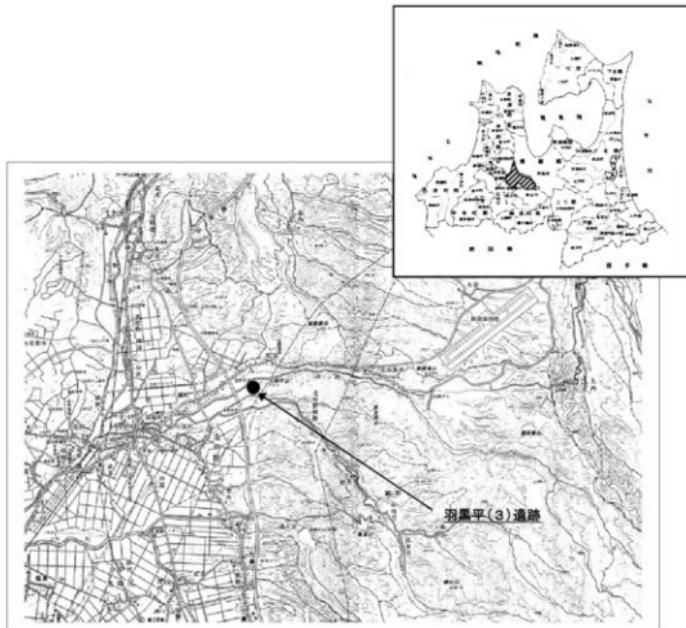


図1. 遺跡位置図

羽黒平(3)遺跡発掘[試掘]調査要項

(平成6年度試掘調査時の要項を基に、平成7・8年度の要項を作成した)

浪岡町教育委員会生涯学習課

1. 調査の目的

中世初期に時代認定できる伝説「美人川と炭焼藤太」の擬定地である羽黒神社周辺は豊富な文化財が存在し、県立郷土館収蔵の「風韻堂コレクション」所収の考古学資料や町指定の考古学資料「立ち膝をする土偶」及び天然記念物の「楊枝杉」の存在はその史料価値を示す事例でもある。

今回、浪岡町は、まちづくりの主要施策である『中世の里』づくりの一環として「美人川再生事業」を計画したところ、その対象地に羽黒平(3)遺跡が存在し埋蔵文化財に影響を及ぼす状況が発生した。

そのため、浪岡町は文化財保護の立場から緊急に発掘調査を実施して記録保存するとともに、今後の事業計画に対する参考資料とするために事業対象地のうち工事により遺構等が失われる恐れのある部分について調査を行うものである。

2. 調査対象地及び所有者

調査地は、東から連なる丘陵の東端部であり、近年まで果樹園地として利用されてきた。調査地は町有地及び個人有地である（調査対象遺跡は図1参照）。

調査地地番等 青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字羽黒平10-1 他

調査面積 2,850m² (平成6年度～8年度実績)

3. 調査期間

平成6年度 4月22日から10月18日まで（現場調査）

10月19日から平成7年3月20まで（整理・概報作成・刊行）

平成7年度 6月26日から11月30日まで（現場調査）

平成8年1月16日から2月29日まで（整理作業）

平成8年度 6月3日から11月10日まで（現場調査）

平成9年1月27日から3月31日まで（整理作業）

4. 調査体制

平成6年度 調査事務局

（浪岡町教育委員会事務局）

教育長 蛭名俊吉

生涯学習課長 西塙幸一

生涯学習課文化班長 石岡まつ

生涯学習課文化班主事 木村浩一

（浪岡町役場）

企画課長 福士芳巳

企画課主任主査 山内幸博

調査担当者

浪岡町史編纂室主査 工藤清泰

調査顧問

青森県立郷土館学芸課長補佐 成田誠治

調査補助員

斎藤とも子、金崎友子

調査協力員

弘前大学教養部学生

調査作業員

太田栄、雪田美信、佐山勇雄、岩崎竹次郎、若林弘、平井つるゑ、山内みつゑ、

菊池さな、山田アエ、兼平ツエ、佐藤レオエ、佐藤イサ

平成7年度 調査事務局

(浪岡町教育委員会事務局)

教育長 蛭名俊吉

生涯学習課長 工藤正志

生涯学習課文化班長 石岡まつ

生涯学習課文化班主事 木村浩一（調査補助）

生涯学習課文化班主事 高橋智佳子（調査担当）

調査顧問

青森県立郷土館学芸課長補佐 成田誠治

調査補助員

斎藤とも子、金崎友子、対馬桂子、武田秀美

調査作業員

太田栄、雪田美信、山田初三郎、若林弘、西谷良二、長谷川ちよ、平井つるゑ、

山内みつゑ、山田アエ、成田チサ、菊池さな、兼平ツエ、佐藤レオエ、佐藤イサ、

寺山ツヤ、工藤愛子、木村節、長谷川やつゑ

平成8年度 調査事務局

(浪岡町教育委員会事務局)

教育長 蛭名俊吉

生涯学習課長 工藤正志

生涯学習課文化班長 山内幸博

生涯学習課文化班主査 木村浩一

生涯学習課文化班主事 高橋智佳子（調査担当）

調査顧問

青森県立郷土館学芸課長補佐 成田誠治

調査補助員

対馬桂子、間山信子、山内明美

調査作業員

成田せつ、工藤初江、寺山ツヤ、工藤タツエ、石村玲子、横山きくあ、工藤愛子、木村節、佐藤イサ、有馬まつえ、長谷川ちよ、太田キサ、齊藤ミツ、小笠原昭子、長谷川やつゑ

5. 遺跡の概要について

羽黒平(3)遺跡は浪岡町大字五本松字羽黒平に所在し、遺物包含地として登録されている。現状は住宅地及び畠地である。

発掘調査は奥羽山脈から律軽平野へと突き出た丘陵地上にある同遺跡のうち、果樹園として利用されてきた部分、南北約120m、東西約60m、計7,200 m²のうち約2,850 m²の範囲を対象とした。

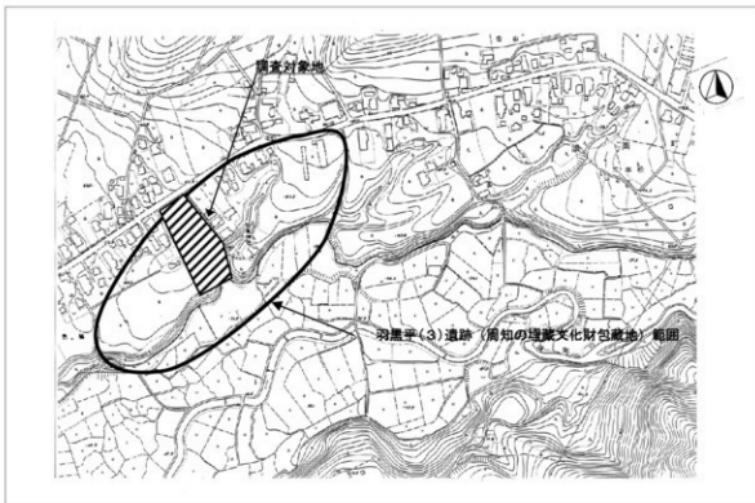


図2. 遺跡範囲と調査対象区位置図

6. 調査方法

今回の調査対象地は現況が農地（果樹園）であるが、「美人川再生事業」に伴い削平する部分について、調査を行うこととし、平成6年度に試掘調査、平成7・8年度に本調査を実施した。

- 1) 測量（実測）は、遣り方と平板測量を併用する。
- 2) 遺構略称は、従来までの浪岡町の調査と整合性を持たせるため、原則として独立行政法人奈良文化財研究所方式をとる。

例 堅穴住居・S I、堅穴建物跡・S T、溝跡・S D、性格不明遺構・S Xなど

- 3) 遺物略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、浪岡町での発掘調査方式をとる。

例 土器・P、石製品・S、鐵製品・F など

遺構については、時代・時期を問わず掘り下げを行う。遺構について平板実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努める。遺物については、可能な限りすべて取り上げるものとする。

調査区については、10mグリッドを基本とし、木杭を設定した。

基準となる杭は、南北軸をアルファベット（南へ昇順）、東西軸を算用数字（東へ昇順）として設定した。

7. 調査報告書の作成

調査結果については、「羽黒平(3)遺跡発掘調査報告書—「美人川再生事業」に係る緊急発掘調査一」として刊行し、成果を公表する。



図3. 美人川再生事業計画平面図

第2章 検出遺構

事業により削平される個所について調査を行い、盛り土により遺構・遺物の保存が図られる部分については調査を行わず現状の維持に努めた。全体からは縄文時代晩期の円形住居跡やフラスコ状ピット、埋設土器遺構、平安時代の堅穴住居跡、時期不明の溝跡等が検出された。調査箇所及び調査区名称・位置については、平面図(図4)参照。



図4. 調査区内遺構配置図

遺跡は河岸段丘上の開発予定部分と、遺跡南側の段丘から3mほど標高の低い沢部分を調査した。

段丘上からは住居跡や貯蔵穴と思われるフラスコ状ピット等が検出されたが、沢部分からは特に建物や構造物等の痕跡は検出できなかった。遺跡の南側及び南西側の水田（畔・水路）からは、過去に繩文土器の破片が出土したという地元の方からの情報を得ていたが、今回調査した部分からは縄文時代よりも中近世の遺物が主に出土した。このことは、本地域が青森（陸奥湾）と弘前・秋田を結ぶ大豆坂通り（まめさかどおり）の沿線であることから、中近世の集落内で使用した遺物とする考え方や、本調査区と沢を挟んだ対岸の羽黒平神社参拝に伴い使用された遺物である可能性など、多様な要因も考えられる。

遺構の分布は、北側の道路沿いでは遺構が薄かった。これは、県道青森一浪岡線道路設置や果樹園耕作時に削平された可能性が高いと思われるが、柱穴・溝跡等についても検出数が著しく少ないとから、元來遺構が少なかったことも考えられる。

南側の河岸に近づくにつれ遺構の密度が高くなり、縄文時代の遺構では晩期のものと思われる円形の住居跡をはじめ、土器を埋設したPitやフラスコ状ピットなどを、平安時代の遺構では、竪穴住居、溝跡などを検出した。

以下、北側から南側に向かいアルファベット順3列(30m)ごとに遺構の検出状況を述べてゆくことと、各遺構について極力遺構別に述べることとしたいが、発掘調査現場での遺構実測図の整理に不備があり、遺構平面図と遺構断面図を同定することが不可能となってしまったため、掲載遺構数が少ないことをご容赦願いたい。また、3ヵ年にわたる調査のため、一遺構に異なる遺構番号を付すこととなってしまった。

報告書では敢えて統一することなく調査時の遺構番号を尊重して記載することとした。

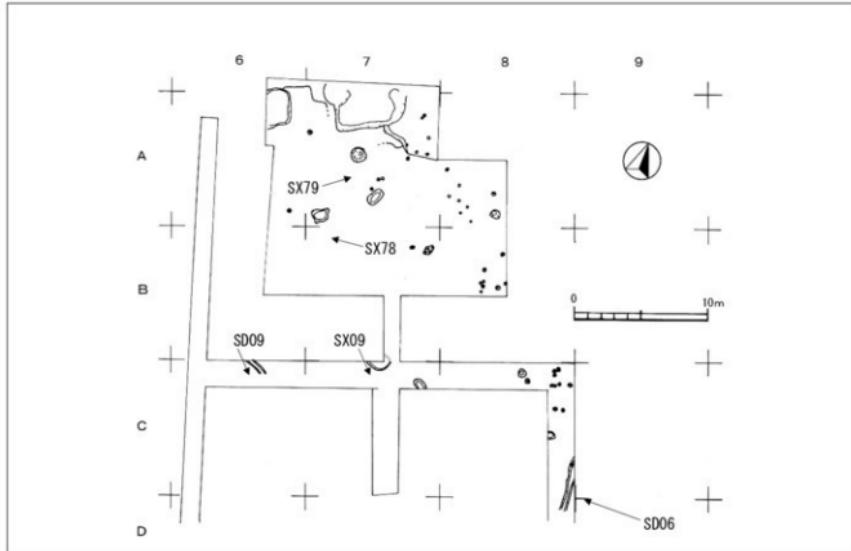


図5. A～C区の遺構検出状況

A～C区（図5）は、調査区のうち最も北側に位置し、A 6・7区は県道青森一浪岡線に接する調査区である。開発事業では駐車場予定地が中心となる。

SD06・SD09及びSX09・SX78・SX79を確認したが、いずれも時期は不明であった。

SD06はさらに南側のD 8区まで延長することを確認した。A～C区の検出遺構からの出土遺物は縄文土器の破片のみであった。

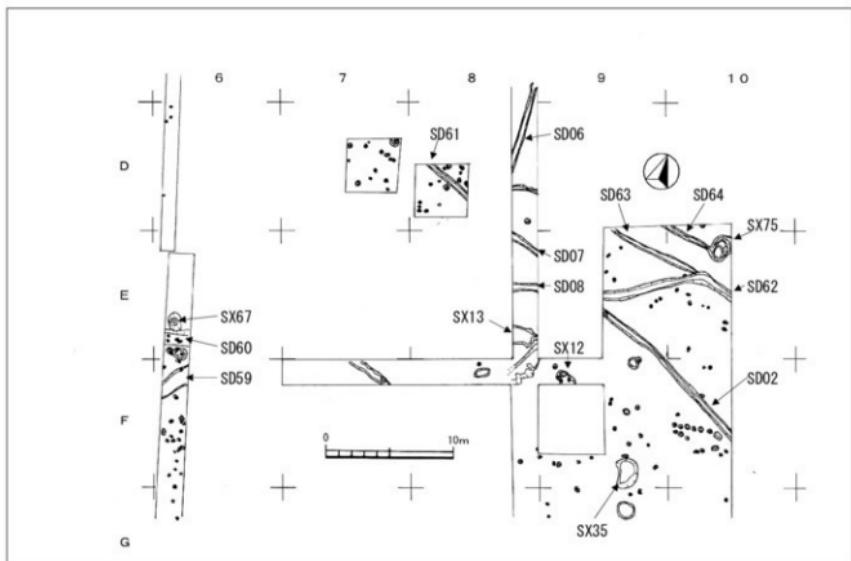


図6. D～F区の遺構検出状況

D～F区（図6）は調査区東側は藤棚（ハーベゴラ）の設置予定地。西側は盛り土（築山）により保護される部分であるため、トレンチ調査により遺跡の保存と遺構の状態把握に努めた。検出遺構のうち東西方向に延びる溝跡は、D・E・Fの8・9・10区にまたがりSD02（SD07・SD61とは同一遺構）を検出した。D 8区の本遺構からは石皿（207）が1点出土している。

C 9区から延びるSD06では石鐵（90）が1点出土している。

他に溝跡として、南西から北東方向に延びるSD08・SD02と、軸線をほぼ同じくするSD63・SD64、西側トレンチで検出したSD59・SD60等の溝跡が縦横に交差して延びているが、新旧関係を把握できなかったため時代変遷は不明である。いずれにせよ、それぞれの溝跡は河岸段丘（沢）に向かい傾斜して延びているため、排水の役割を果たしていたことが窺える。

F 9区検出のSX35は250 cm×150 cmの不定形土坑であり、石鐵（103）が1点出土している。

E 6 区検出の S X 6 7 (図 7、表 5) は 140 cm × 95 cm の楕円形土坑であり、打製石刃 (195・196) が出土している。

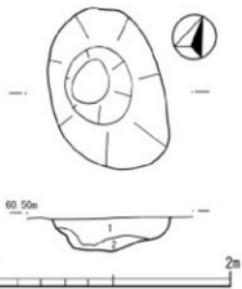


図 7. S X 6 7 遺構平面図

E 10 区検出の S X 7 5 (図 8、表 6) は 220 cm × 150 cm、深さも 150 cm の楕円形土坑である。本遺構は S D 6 4 と重複しているが、新旧関係は不明である。なお、溝跡に付随する遺構（水溜等）である可能性も考えられる。

いざれの遺構についても時期判断は難しい。耕作等に伴う埋戻し時の遺物混入等が考慮されるため、縄文時代の遺構であるか否かについても判別しがたい。

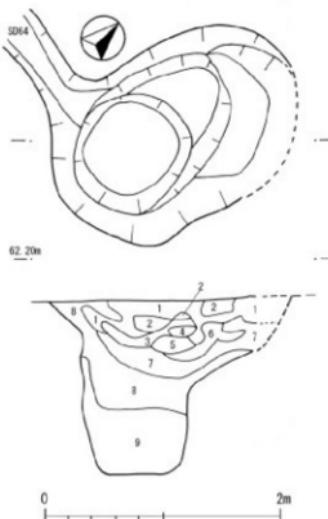


図 8. S X 7 5 遺構平面図

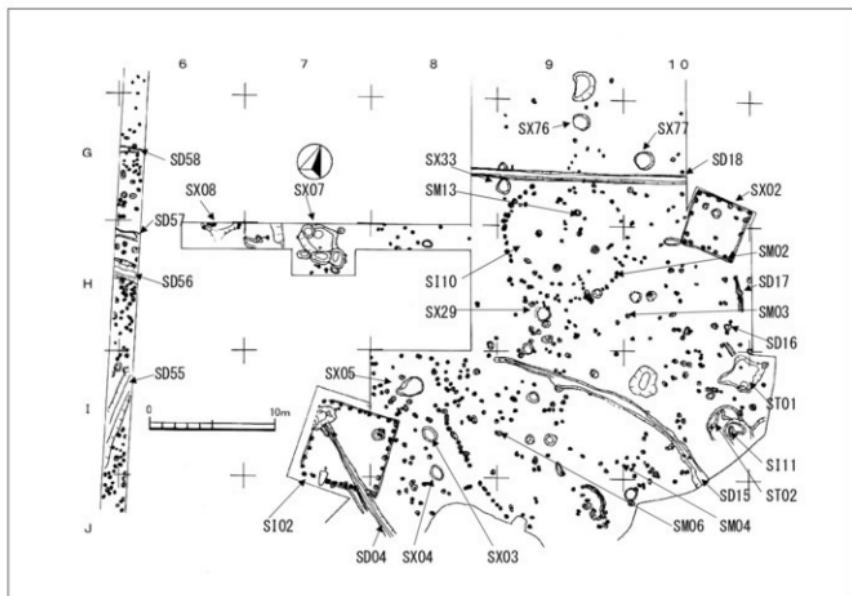


図9. G～I区の遺構検出状況

G～I区(図9)は藤棚(バーゴラ)や四阿を整備する予定地である。

G・H 9区から直径10m程の縄文時代晩期と思われる円形住居跡のSI10(図10)を検出した。主柱穴を4本有し、床面は地山面までしか掘り下げを行っていない建物で、平地式住居の可能性がある。外周の柱穴列からは南東側に出入り口施設を設けたものと考えられる。また、内部の柱穴列は主柱穴の位置から、建て替えではなく住居跡の内部構造に関する柱穴の可能性が考えられる。SI10からは深鉢型土器(1)、縄文晩期の台付浅鉢型土器(34)、広口壺型土器(61)、注口土器の口縁部(63)、石礫(91・92・93)、石砲(155)が出土している。ただし、(1)については、縄文早期の赤御堂式土器と思われる内外面に斜縄文を施してあるものであり、本遺構に伴うものではないと思われる。また、SI10に関連すると思われる埋設土器遺構SM02・SM13を検出している。

SM02(図11、表7)からは縄文晩期の深鉢型土器を、SM13(図12、表8)からは深鉢型土器(15)の底部が出土している。

埋設土器遺構は他にH10区でSM03を、I9区でSM04・SM06を検出しているが、他の遺構との関連性は把握できない状況である。いずれも縄文時代晩期の深鉢型土器の胴部下半以下を検出したものである。SM04(図13、表9)から出土した深鉢型土器(3)を写真で示す。

また、SI10周辺からは、SX29・SX33・SX76・SX77等の土坑を検出した。

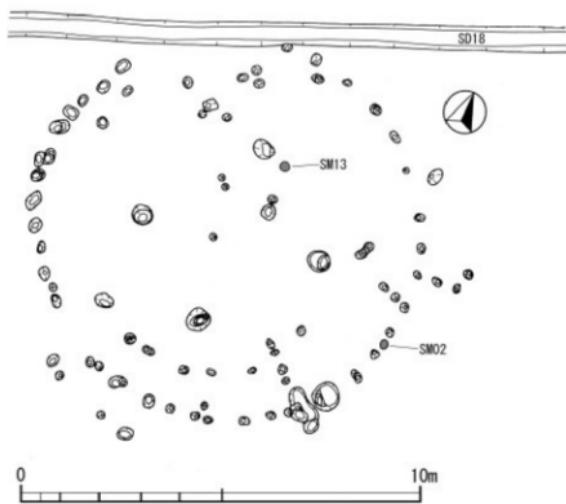


図10. S110遺構平面図

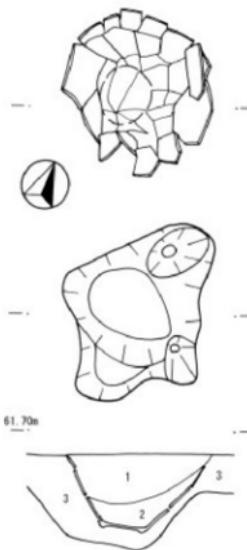


図11. SM02遺構平面図



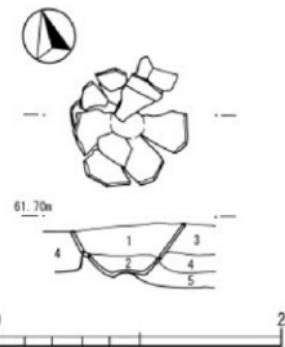


図 12. SM13 遺構平面図

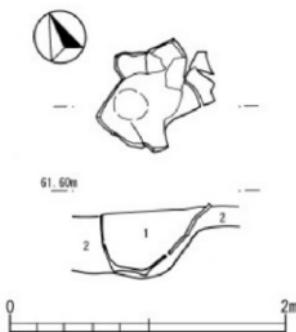


図 13. SMO4 遺構平面図

S X 2 9 (図 14、表 10) は掘り方直径 110 cm 程度の円形土坑で、縄文晩期の深鉢型土器 (2 2)、壺型土器 (5 7・5 8・5 9)、石鐵 (1 0 1・1 0 2)、打製刃器 (1 9 2)、磨り石 (2 1 3)、円形石製品 (2 3 9) が出土している。

S X 3 3 (図 15、表 11) は掘り方 125 cm × 100 cm の卵形を呈する土坑である。特筆すべき遺物の出土は見られなかった。

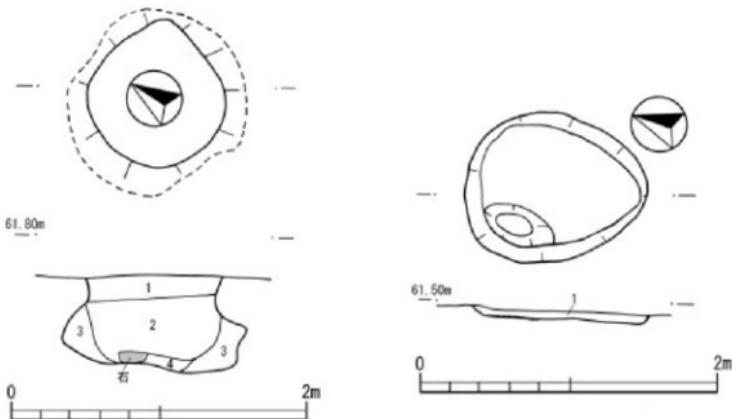


図 14. SX29 遺構平面図

図 15. SX33 遺構平面図

S X 7 6 (図 1 6、表 1 2) は直径 120 cm、深さ 20 cm 程の土坑墓の可能性が考えられるもので、石鐵が 8 点 (1 0 5 ~ 1 1 2)、耳飾り型土製品 (8 3) が出土している。

S X 7 7 (図 1 7、表 1 3) も直径 140 cm、深さ 20 cm 程と S X 7 6 と同規模であり、土坑墓の可能性が考えられるもので、石鐵が 1 0 点 (1 1 3 ~ 1 2 2) 出土している。

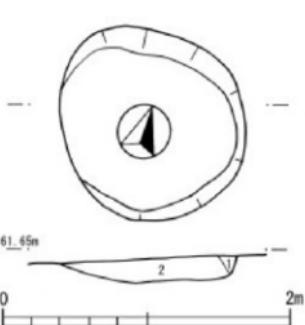


図 1 6. S X 7 6 道構平面図

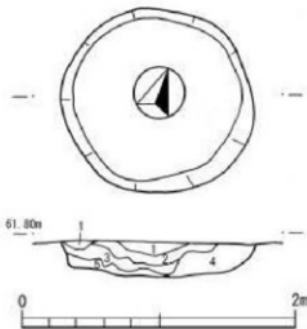


図 1 7. S X 7 7 道構平面図

I 7 区で検出した堅穴住居跡 S I O 2、G・H 1 0 区で検出した堅穴住居跡 S X 0 2 はともに平安時代の遺構である。これらの遺構はともに概報（羽黒平（3）遺跡発掘〔試掘〕調査報告書を示す。以下同様とする）にて報告済みである。

溝跡は北側の調査区よりも密度は低く、時期は不明である。

I 7 区で検出した S D 0 4 は、S I O 2 と重複し S D 0 4 が新しい。特筆すべき出土遺物は無い。

I 9・1 0 区で検出した S D 1 5 は沢に向かい東西に延びる溝跡で、縄文晩期の注口土器口縁部 (6 2) が出土している。

S D 1 6・S D 1 7 は H 1 0 区で検出したが、きわめて浅い遺構であり延長を確認できなかった。土器の小破片のみの出土で特筆すべき遺物は無い。

S D 1 8 は G 8・9・1 0 区で検出した東西方向に直線的に伸びる溝跡で、掘り方からは現代の溝跡の可能性もある。石鐵 (8 8・8 9)、ナイフ形石器 (1 6 5)、磨製石斧 (1 7 2)、たたき石 (2 1 8)、円形石製品 (2 3 4・2 3 5) が出土しているが、埋戻し時の混入と考えられる。

西側トレーンチ部の I 5・6 区で検出した S D 5 5 は南北に延びると思われる溝跡で、石鏡 (1 5 7・1 5 8) が出土している。

H 6 区で検出した S D 5 6 は東西に延びると思われる溝跡で、打製刃器 (1 9 1)、円形石製品 (2 3 6) が出土している。

S D 5 6 に並走するように検出した S D 5 7 からは石錐 (1 4 2) が出土している。

G 6 区で検出した S D 5 8 からは、土器の小破片のみで特筆すべき出土遺物は無い。溝跡については、いずれも時期は判別できなかった。

その他、性格不明遺構として、**SX03・SX04・SX07・SX08**を検出した。

SX03は18区で検出した140cm×100cmの楕円形の土坑で、石器（95）が1点出土している。

SX04も18区で検出した120cm×90cm程の土坑であるが特筆すべき出土遺物は無い。

SX07はH7区で検出したが、農作業による擾乱と思われるもので、縄文晩期の深鉢型土器（20）、台付浅鉢型土器（32）台付鉢型土器（33・39）、皿型土器（46）、壺型土器（56）、土偶（74）、土器軸用円形土製品（84）、石器（96～100）、石錐（143）、ナイフ形石器（167）が出土している。

H6区で検出した**SX08**も耕作面からの掘り下げであることから、農耕による擾乱跡と判断した。出土遺物は無い。

確認時に建物跡と想定して調査を進めたが、性格不明遺構または擾乱として整理した遺構もある。

I10区で確認した**SI11**は不定形の遺構であり、土坑または風倒木痕の可能性がある。出土遺物は、不明石製品（251）、須恵器坏（257）、土器器甕（259）、土器器坏（261）が出土している。

SI11と重複していると捉えた**ST02**についても同様であり、土坑または風倒木痕等が考えられる。出土遺物は縄文晩期の台付土器（38）、壺型土器（51～55）、土器器坏（264）がある。

なお、I10区で検出した**ST01**については、確認時に堅穴建物として位置づけ調査を進めたが、遺構平面も不定形であり、性格不明遺構として整理した。埋土からナイフ形石器（166）が出土している。

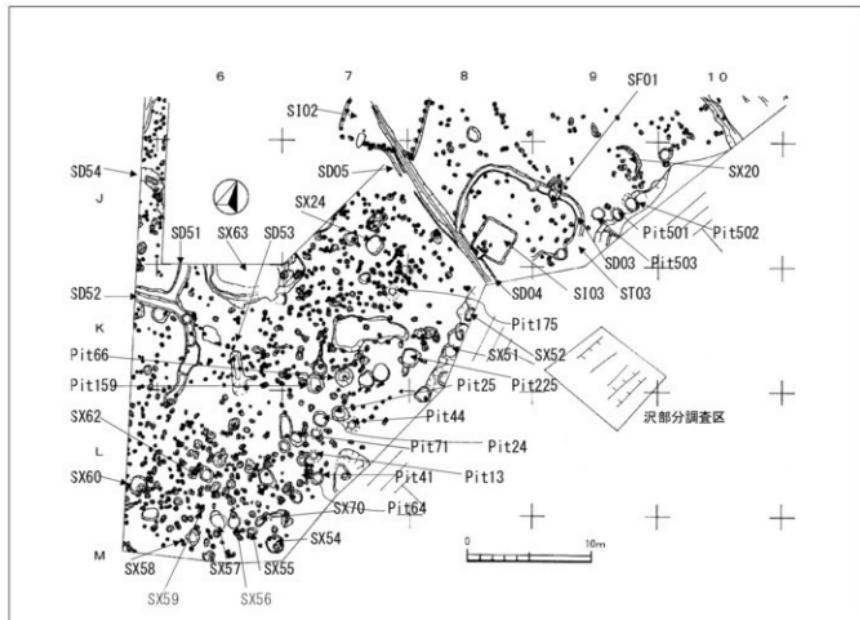


図18. J～M区の遺構検出状況

J～M区（図18）は、トイレや園内灯などの便益施設整備予定地であり、沢部分（斜面下）も四阿建設予定地であったため調査を行った。

J 8区で検出したS I O 3は概報で報告済である平安時代の堅穴住居跡である。

J 9区で検出したS F O 1（図19、表14）は直径70cm程度の円形を呈する石囲い炉である。周囲に明確な住居跡は確認できなかった。本遺構からの特筆すべき出土遺物は無い。

検出位置が不明であるため配置図には記していないが、埋設土器遺構のS M O 7（図20、表15）を検出した。本遺構は深鉢型土器（6・7・8・9）を4回にわたり同一Pitに埋設しているもので、他遺構との関連は不明である。

J 8・9区で検出したS D O 3は円形周溝状の溝跡であり、概報で報告済みのとおり中世の溝跡と考えられるが、斜面に位置したためとS D O 4と重複した影響か南側が確認できなかった。S D O 4との新旧関係は不明である。

J・Kの7・8区で検出したS D O 4・S D O 5は概報で報告のとおりS I O 2の北西から南東の斜面まで延伸する溝跡であり、S D O 4がS D O 5より新しい。重複する他遺構よりも新しいと考えられるが時期は不明である。

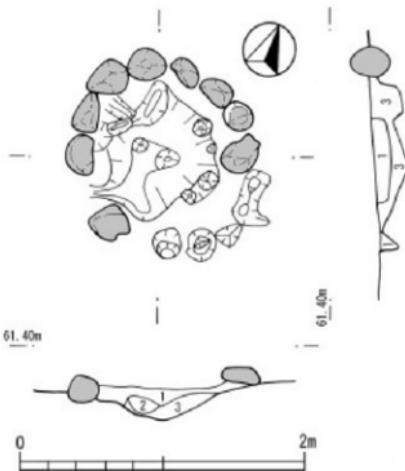


図19. S F O 1遺構平面図

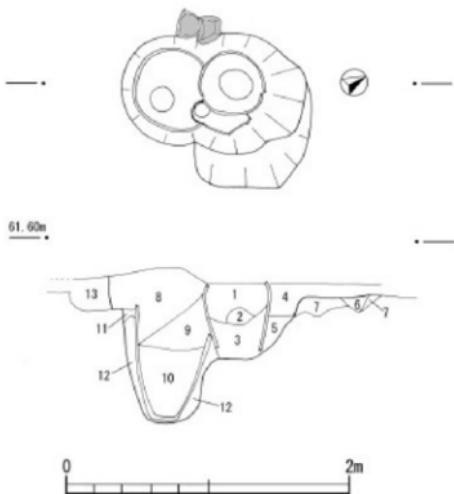


図20. SMO 7遺構平面図

K 6 区で検出した S D 5 1 と J 5 区で検出した S D 5 4 は同一遺構の可能性がある。J・K の 5・6 区で検出した S D 5 2 とともに馬蹄形の溝跡となる可能性があるが、他の遺構（溝内の建物跡）が確認できなかつたため性格は不明である。S D 5 1・S D 5 4 からは特筆すべき出土遺物は無い。S D 5 2 からは磨製石斧（173）が出土している。

K 6 区で検出した S D 5 3 は南北方向に延びると思われるが、掘り方が浅いことから全体が把握できなかつた。特筆すべき出土遺物は無い。

J～M の 6・7 区は、特に柱穴や土坑などを多く検出した区域で、直径 1 m を越える土坑も多数検出している。ここでは、確認時に P i t 番号を付し調査を進めた遺構を P i t として、同規模の遺構でも性格不明遺構（S X）として番号を付した遺構については後述するものとする。

L 7 区で検出した P i t 1 3 は掘り方直徑 50 cm、底面直徑 100 cm のフラスコ状ピット。

L 7 区で検出した P i t 2 4 は、直徑 120 cm 程度の土坑。

L 7 区で検出した P i t 2 5 は直徑 130 cm 程度の土坑。

L 7 区で検出した P i t 4 1 は掘り方 100 cm × 80 cm 程度の楕円形土坑。

L 7 区で検出した P i t 4 4 は、掘り方直徑 60 cm、底面直徑 130 cm 程度のフラスコ状を呈する。これらの遺構からは特筆すべき出土遺物は出土しなかつた。

L 7 区で検出した P i t 6 4 は直徑 70 cm 程度の土坑で、袖珍の注口土器（64）が出土している。

K 7 区で検出した P i t 6 6 は直径 150 cm 程度の土坑で、縄文晩期の台付土器 (3 7)、土偶の脚部と思われる土製品 (7 3) が出土している。

L 7 区で検出した P i t 7 1 (図 2 1、表 1 6) は掘り方直径 70 cm、底面直径 120 cm 程度のフラスコ状ピットで、壁面に立てかけ、沿わせた形で完形の石皿 (2 0 5) が出土している。

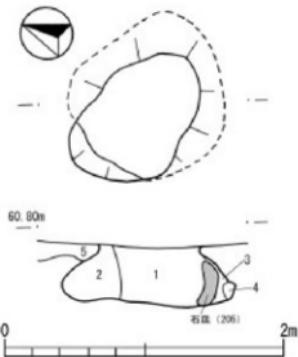


図 2 1. P i t 7 1 遺構平面図

K 7 区で検出した P i t 1 5 9 は直径 120 cm 程度の土坑で、特筆すべき出土遺物は無い。

K 7 区で検出した P i t 1 7 5 は掘り方直径 60 cm、底面直径 120 cm 程度のフラスコ状ピットで、石鏃 (8 7) が出土している。

K 7・8 区で検出した P i t 2 2 5 は 130 cm 程度の隅丸方形の土坑で、特筆すべき出土遺物は無い。

J 9 区で検出した P i t 5 0 1 は掘り方直径 80 cm 程度のフラスコ状ピットと思われるが、斜面の崩落により形状が不明確となっており、埋土も流れ込み等が考えられる。出土遺物は縄文晩期の深鉢型土器 (2 6)、土師器甕 (2 5 8) がある。

J 9 区で検出した P i t 5 0 2・P i t 5 0 3 ともに掘り方直径 100 cm 程度で、底面が若干フラスコ状に広がる土坑である。特筆すべき出土遺物は無い。

性格不明遺構として分類した遺構のうち、J 9 区で検出した S X 2 0 は完掘時には三日月型の溝のみとなつた。確認範囲からは縄文晩期の台付土器 (4 0・4 1)、石錐 (1 4 4・1 4 5)、石鏡 (1 5 9)、ナイフ形石器 (1 6 8)、磨製石斧 (1 7 5)、打製石斧 (1 8 5)、磨り石状の薄い梢円形石器 (不明石製品: 2 5 2) が出土している。

J 7 区で検出した S X 2 4 (図 2 2、表 1 7) は 140 cm × 150 cm 程度の円形土坑。特筆すべき出土遺物は無い。

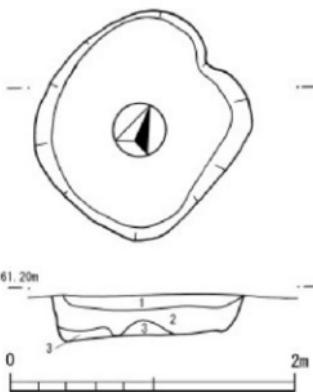


図2.2. SX 24遺構平面図

K 8 区で検出した SX 5 1 は掘り方直径 100 cm、底面直径 130 cm程度のフラスコ状ビットであるが、南東側が斜面の崩落により欠損している。

K 8 区で検出した SX 5 2 は 100 cm × 60 cm程度の楕円形土坑。

SX 24・SX 5 1・SX 5 2について特筆すべき出土遺物は無い。

M 6 区からは SX 5 4～5 9 を検出している。

SX 5 4 は直径 130 cm程度の不定形土坑で、縄文晩期の深鉢型土器（23）が出土している。

SX 5 5 は 50×80 cm程度の楕円形土坑で特筆すべき出土遺物は無い。

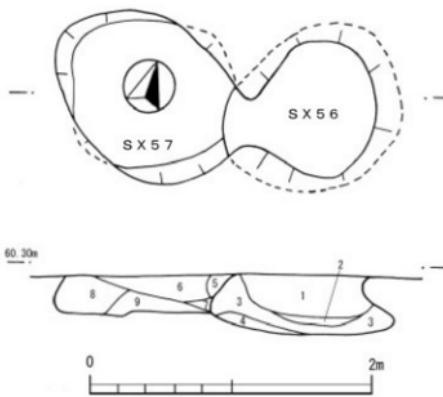


図2.3. SX 56・SX 57 遺構平面図

S X 5 6 (図2 3、表1 8) は掘り方直径80 cm程度、底面直径110 cm程度のフラスコ状ピットで、縄文晩期の浅鉢型土器 (2 7) が出土している。

S X 5 7 (図2 3、表1 8) は掘り方110 cm×150 cm程度の楕円形土坑で特筆すべき出土遺物は無い。S X 5 6とS X 5 7は重複しており、S X 5 6が新しい。

S X 5 8は100 cm×130 cm程度の楕円形土坑で、石皿 (2 0 8)、磨り石 (2 1 6)、石棒 (2 2 9) が出土している。

S X 5 9 (図2 4、表1 9) は掘り方直径約90 cm程度で、底面の西側がややフラスコ状に膨らむ土坑で特筆すべき出土遺物は無い。

L 5 区で検出したS X 6 0は直径150 cm程度の円形土坑で、石鐵 (1 0 4) が出土している。

L 6 区で検出したS X 6 2 (図2 5、表2 0) は130 cm×100 cm程度の楕円形の土坑で特筆すべき出土遺物は無い。

K 6 区で検出したS X 6 3は農作業による抜根跡と思われる。打製石斧 (1 8 6)、打製刀器 (1 9 3) が出土している。

M 6 区で検出したS X 7 0は100 cm×60 cmの楕円形土坑である。特筆すべき出土遺物は無い。

当初、J 9 区のS D O 3南東部末端でS T O 3を確認したが、調査を進めると明確な遺構平面は確認できなかった。この範囲からは、縄文晩期の皿型土器 (4 5)、石鐵 (9 4)、磨製石斧 (1 7 4)、円形石製品 (2 3 7・2 3 8) が出土している。

沢部分では遺構は確認できなかった。出土遺物は打製刀器 (1 9 8・1 9 9) と青磁皿 (2 6 5) があるが、いずれも覆土からであり、斜面上部からの流れ込みと思われる。

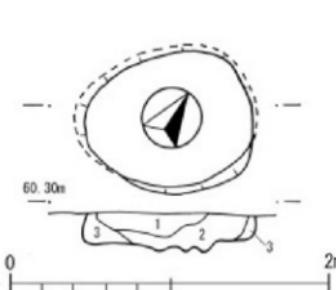


図2 4. S X 5 9 遺構平面図

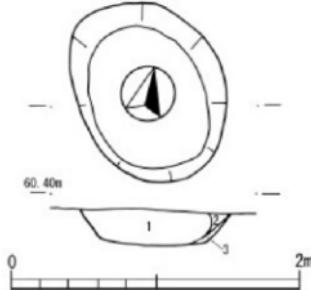


図2 5. S X 6 2 遺構平面図

第3章 出土遺物

土器・土製品

土器は縄文時代晩期の深鉢型土器を中心に出土している。各遺物の計測値等については巻末の計測表を参考されたい。

・深鉢型土器（1～23）

（1）は縄文早期の赤御堂式と考えられる破片で、内外面に斜縄文が施されている。縄文晩期が主となる本遺跡では早期の遺物出土は本例のみとなる。（2～23）は晩期の粗製深鉢型土器で、胴部下半や底部を埋設した状態で出土したものが多い。口縁がわずかに内湾し、外面には炭化物の付着が認められる。

・浅鉢型土器（24～31）

（24）は晩期の鉢型土器で、胴部は斜縄文が施され、口縁部でくびれを持ち、肩部に粘土粒が張り付くものである。（25）は片口が大きく張り出した晩期の鉢型土器で、外面に厚く炭化物が付着している。

（26）は胴部に斜縄文を、口縁部に横位の沈線により文様を施している晩期の鉢型土器で、口唇部はM字の突起が7単位施されて波状を呈している。（27）は晩期大洞Aの浅鉢型土器で、胴部に斜縄文を施した後、胴部上半に横位の沈線文を施し、肩部に4単位の突起を付している。（28）は外面全体に斜縄文を施した浅鉢型土器で、底部も丸く碗や壺のような形状を呈している。（29）は晩期の無文の浅鉢型土器であるが、底部を内側から部分的に押し出し、四脚状に加工している。（30）は口縁部のみの出土で、肩部に大きな突起が付される晩期の鉢型土器で、胴部の斜縄文と口縁部の沈線文とともに緻密で良好な焼成である。（31）は晩期の浅鉢型土器で、胴部には斜縄文口縁部に沈線と2条の刺突による文様帯を有する。

・台付土器（32～44）

（32）は晩期大洞C1の台付浅鉢型土器である。概報では碗として報告していたが、整理に当たり台が付くことが判明した。全面に赤色顔料が施されている。（33）は晩期の台付鉢で胴部に斜縄文を施し、波状口縁を有するものである。（34）は無文の台付浅鉢型土器で、台上部に隆帶が回るもの。（35）は晩期大洞C2の台付（浅鉢）型土器で内面に雲形文が施される。台部の内部をえぐって成形しており、器底部の厚みが4mm程度と極端に薄くなっている。（36～44）台付土器の台部分のみ。無文のものが多いが、沈線を施したもの（37）も認められる。

・皿型土器（45～47）

（45）は晩期大洞C2の皿型土器で、外面に雲形文を施している。（46）は晩期大洞C2の精円形を呈し、前面に赤色顔料を塗布した皿型土器で、概報で報告済みのものである。（47）は晩期の無文皿型土器で、内外面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

・壺型土器（48～61）

（48）は球状の胴部に斜縄文を施した壺型土器。（49）は卵形の無文の壺型土器。（50）は胴部に斜縄文を施した肩部が張る壺型土器。（51）は無文の壺型土器。（52）は小型で無文の壺型土器で袖珍土器よりは大きいものの、今回の調査では最小の壺型土器である。（53）は胴部全体に斜縄文を施し、肩に最大径を持ち底部の小さな壺型土器。（54・55）は小型の無文壺型土器。（56）は概報で報告済みであるが、報告済みであるが波状口縁と肩部に隆帶による文様を付した大型の壺型土器である。（57）は全面に赤色顔料を塗布した痕跡の残る無文の算盤玉状の壺型土器である。（58）は胴部に斜縄文を施した

小型の壺型土器。(59)は卵形の高さ29.4cmを測る比較的大きな壺型土器で、胴部全面に斜縞文を施している。(60)は壺型土器の頸部であるが、口縁に向かひそばまる形状で、波状口縁と粘土粒の貼り付けを施している。(61)は無文の広口壺型土器である。

・注口土器(62・63)

2点出土しておりともに注口土器の注ぎ口部分である。

・袖珍土器(64~72)

(64)は注口土器である。胴部に雲形文を模したと思われる沈線文が施されている。(65・69・71・72)は台付土器である。(66)は深鉢型土器で、口縁部に刺突列による文様を施している。

(67)は無頸壺、(68)は壺型土器である。(70)は深鉢型土器と思われる。

・土偶・土製品(73~85)

(73・78・80)は土偶の脚部と思われる。(74)は頭部の欠損した土偶である。前面に乳房状の突起が付され、前面と背面に沈線により文様が施されている。(75)は土偶胴部と思われる。前面に上下方向の刺突列による文様が施されている。(76・77)は土偶の腕部である。(79・82)は土偶の脚部でしたが、キノコ状土製品や土馬等の可能性も考えられるものである。(81)は土偶の脚部としたが小片であり確証はない。(83)は全面に赤色顔料を施した耳飾り状土製品である。一方の端部を刻みにより細かな花形状としている。(84・85)は土器転用の円形土製品である。

石器・石製品

石器・石製品についても、土器・土製品同様に後述の計測表にてスケールを報告している。

・石鎚(86~140)

(87・131)など石鎚としては比較的大型の尖頭器についても便宜上ここで報告するものとした。形態的に特徴のあるものとしては、無柄のものとして(94・125)がある。また、同じく無柄で返し部分が作り込まれていない棒状の石鎚(123・126・139)がある。(113)は魚様の形状をしており、先端形状も錐状ではなく薄刃の刃物状となっているもので、アメリカ型石鎚に分類しても良いと思われる。また、返し部分が外反するような反りの強い三角形を呈するもの(114・133)も出土している。なお、(100・132)は石鎚に分類したが、石錐の可能性も考えられるものである。

・石錐(141~148)

(141)はサイズ、形態ともに他と異なるため、後述する(254)同様に不明石製品と分類することも考慮したが、欠けた一端が錐状に延びる可能性が高いため石錐として報告する。(146)は錐部分のみと解し、本項で報告する。

・石匙(149~154)

石匙は横型のもの(149・150・153)と縦型のもの(151・152・154)の6点が出土した。

・石鋸(155~163)

石鋸は、石器作成時に打点以外の辺に剥離による刃部を付しているものとした。したがって、円形を呈する石器もここに含み報告する。(155・156・159・163)は剥片を刃部の剥離のみで石器としたものであり、石鋸とすべきではないかもしない。

・ナイフ形石器（164～171）

剥片の2辺を剥離による刃部としたもので、石鍬よりも鋭利な先端を有する石器をここに分類した。

・磨製石斧（172～184）

磨製石斧と思われる遺物は報告した遺物以外にも出土しているが、ここでは残存部分の大きな遺物のみを報告する。

（172・182）は6cm程度の比較的小さな石斧、（175）は刃の摩耗が著しいものである。

・打製石斧（185・186）

（185）は石材への加工を最小限として作成した石斧、（186）は剥片を方形に剥離加工した石斧である。

・打製刃器（187～204）

打製刃器は剥片に対しいずれかの辺に剥離による刃部を作成したものとした不定形の石器である。

・石皿（205～210）

石皿と思われる遺物は報告した遺物以外にも出土しているが、ここでは残存部分の大きな遺物のみを報告する。（205）は完形で出土した石皿である。底面への加工は施していない。（206）は使用面の摩耗が著しい。（207）は使用面のうち中心部の摩耗が著しく窪みとなっている。（210）は使用面が平面となっている。この形状の破片は1点のみであった。

・磨石（211～216）

（211）は1面が特に摩耗し、平面となっているもの。（214）は側面のうち1面が摩耗して平面となっているものである。（216）は全面に赤色顔料が付着しており、弁柄等を磨ったものと思われる。

・たたき石（217～223）

（219・220）は2面に使用痕（窪み）が見られるものである。

・石棒（224～232）

石棒として全形が判別できる遺物は出土しなかった。（225・229）は石棒の頭部（端部）である。（224・228・230・232）も端部である。（226）は断面形が菱形となるものである。

・円形石製品（233～249）

概報では「円盤状石製品」として報告した遺物である。直径6cm前後のものが多いが、（240）のような直径10cmほどのものや、（246）のように直径5cmに満たないものも出土している。

・三角形石製品（250）

1点のみの出土で、三角形の頂点を打ち欠いている。

・不明石製品（251～256）

（251）は滑石に2か所の窪み穴を付している。破片であるため全体形は不明である。（252）は長楕円形で成形痕が使用痕か不明な磨り跡が見られる。（253）は磨製石器であり長辺の1辺を刃部のように薄く加工しており、使用の痕跡も認められる。（254）は石鍬の種類かもしれないが、全体形・使用方法ともに不明である。（255）は三角形の断面を有する磨製石器であるが、全体形・使用方法とともに不明である。（256）は1面を平面に加工したもので、平面化した面以外の表面に窪み穴と刻線が認められる。

平安時代以降の遺物

・須恵器（257）

須恵器の出土は少なく、甕の破片及び坏である。（257）は糸切底で火拂の付いた坏である。

・土師器（258～264）

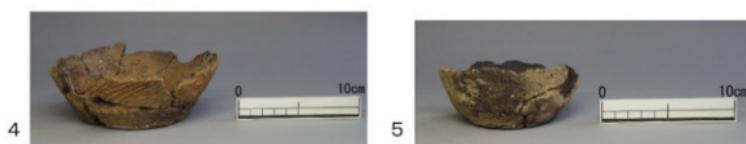
甕（258～260）、坏（261～264）など、10世紀前半を中心とした時代の遺物が出土している。（258・260）は底部のみ。（259）は口縁が外反し、表面の調整が良好な甕である。（261）は内面黒色処理をした糸切底の坏であり、胴部下半（底部近く）に刻線による文様が施されている。文様が何を表したものか解説できなかった。（262・264）は手捏ね成形の坏。（263）は回転糸切底の坏である。

・陶磁器（265～273）

陶磁器は中近世の舶載、国産のものがあり、いざれも出土量がきわめて少ない。16世紀以前の遺物は、（265）が青磁皿の高台部で見込みに印花文が施されている。（266）は青白磁皿の破片と思われる。（267）は染付脇の破片である。（268）は底地不明の瓦質の擂鉢である。17世紀以降の遺物は、（269・270）は唐津の皿と思われる。（271）は越前系の擂鉢である。（272・273）は伊万里の小碗である。

その他（274）

錢貨（274）は寛永通宝である。











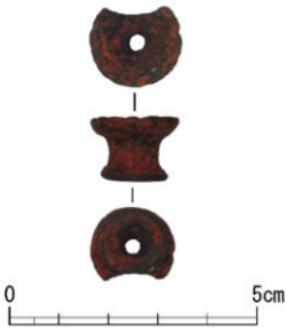
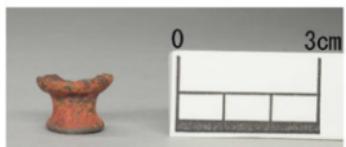


















102 0 5cm



103 0 5cm



104 0 5cm



105 0 5cm



106 0 5cm



107 0 5cm



108 0 5cm



109 0 5cm







126

0 5cm



127

0 5cm



128

0 5cm



129

0 5cm



130

0 5cm



131

0 5cm



132

0 5cm



133

0 5cm





141



142



143



144



145



146



147



148







153



154



155



156



157

0 5cm



158

0 5cm



159

0 5cm







172 0 5cm



173 0 10cm



174 0 10cm



175

0

10cm



176

0

10cm



177

0

10cm



178

0

10cm



179

0

10cm



180

0

5cm



181

0

10cm



182

0

5cm



183

0

5cm



184

0

10cm







187



10cm



188



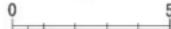
189



190



191



192



10cm



193 0 5cm



194 0 5cm



195 0 10cm



196 0 5cm



197 0 5cm





205



0 10cm



206



0 10cm



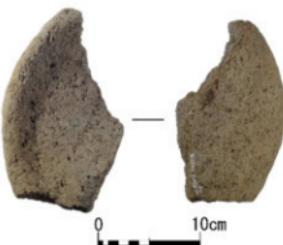
207



0 10cm



208



209



210



211

0 10cm



212



213



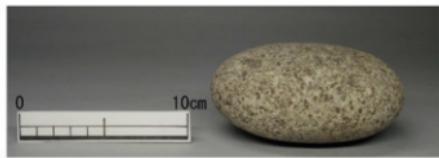
-



|



214



215



0 10cm



216

0 10cm



217

0 10cm



218

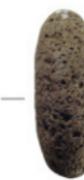
0 10cm



219



220



221

SARASVATI
MANTRA
OM SARASVATI
PRAPTA
OM



222

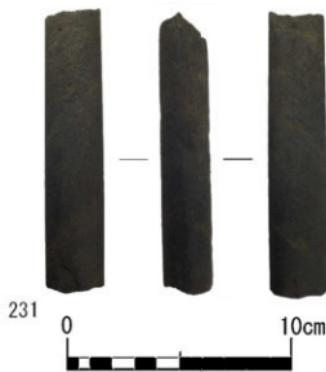
0 10cm



223

0 10cm







235



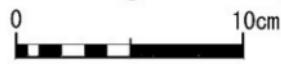
236



237



238





239

0

10cm



240

0

10cm



241

0

10cm



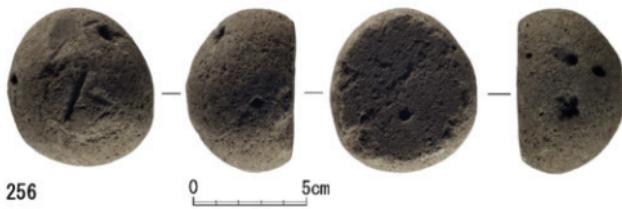
242

0

10cm







256

0 5cm



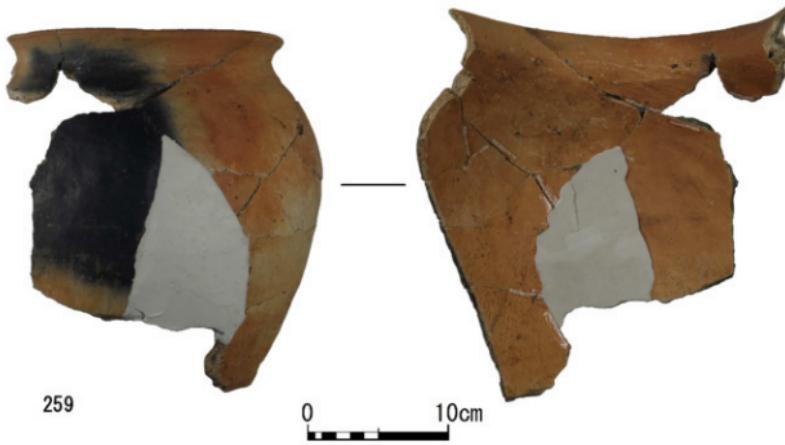
257

0 10cm



258

0 10cm



259

0 10cm



260



261



262



263



264



第4章　まとめ

今回の調査は、浪岡町の「美人川再生事業」に併い実施した緊急発掘調査事業であった。史跡浪岡城跡の環境整備事業（ふるさと歴史の広場事業）と並行することとなったため、調査のスタートである試掘調査を教育委員会職員ではなく、担当できる能力のある他部局の町職員で実施し、2年目からは急速新規職員を採用・配置するなど、異例の調査体制となつた。

このなかで、調査図面等資料の不備もあり、報告書としては十分なものとなっていないことを反省し、今後の自戒としたい。

さて、本調査では羽黒平（3）遺跡が縄文晚期を主とする良好な遺構・遺物を包含していることが改めて確認できた。

青森県立郷土館に所蔵されている「風韻堂コレクション」の中に本遺跡出土の土器が含まれているが、今回の調査では、破片資料ではあるがそれらに劣らない資料が確認できた。遺跡内南側の水田所有者によると「昔は用水堰を掘り直すと土器がゴロゴロと出てきた。」との聞き取りもあり、沢部分の調査に期待したが、実際は全く遺構・遺物ともに検出できなかつた。

ともあれ、河岸段丘上の今回の調査区においても、堅穴構造ではない直径10m程の円形住居跡や、多数のプラスコ状ピット、土坑など、特色ある遺構が検出できた。また、遺物についても、晩期（大洞C1、C2）を主とする良好な土器が出土している。石器についても、多数の剥片の検出や、各種石器の出土、報告書では掲載しなかつたが、母岩や剥離痕のある石材が多数出土しているなど、縄文時代晩期の生活を彷彿させるような調査となつた。

なお、本遺跡についてこれまで発掘調査を行っていないかった。今回の開発に係る調査では、篠山等盛り土により保護される部分については実施していないが、出土遺構・出土遺物とともに縄文時代晩期の良好な遺跡であることが確認できた。このことから、今後の開発等の遺跡改変に関する情報について積極的に聴取し、適時、発掘調査による記録保存を行う必要がある。

表1. 出土縄文土器計測表

図版No.	遺物名	法量			重量	出土遺構	遺物番号	特徴
		幅	様	高さ(厚さ)				
1	深鉢型土器				SI10	P-	赤御堂式土器	
2	深鉢型土器	(25.0)	(27.8)		SM01	P019		
3	深鉢型土器	(19.7)		24.2	SM04	P259		
4	深鉢型土器	(14.8)		(5.7)	SM05	P262	底部のみ	
5	深鉢型土器	(11.9)		(4.9)	SM05	P263	底部のみ	
6	深鉢型土器	30.6		(41.3)	SM07	P251		
7	深鉢型土器			22.8	SM07	P252		
8	深鉢型土器	(28.0)		(21.0)	SM07	P253		
9	深鉢型土器			(14.0)	SM07	P254		
10	深鉢型土器	(28.0)		(28.5)	SM08	P256		
11	深鉢型土器	(29.2)		(25.9)	SM09	P077A		
12	深鉢型土器	(24.5)		(21.5)	SM09	P077B		
13	深鉢型土器	(19.5)		(16.7)	SM11	P075A		
14	深鉢型土器	(17.0)		(16.5)	SM12	P255		
15	深鉢型土器	(20.5)		(16.6)	SM13	P258		
16	深鉢型土器	(26.5)		(20.0)	SM14	P067		
17	深鉢型土器	(20.0)		(22.5)	SM21	P261		
18	深鉢型土器	(21.5)		(20.6)	SM22	P257	底部なし	
19	深鉢型土器	(24.8)		(25.5)	ST04	P066		
20	深鉢型土器			20.8	(23.3)	SX07	P073	底部なし
21	深鉢型土器			21.6	(203.0)	SX21	P025	底部なし
22	深鉢型土器			(17.0)	10.4	SX29	P027	底部のみ
23	深鉢型土器			(21.0)	(16.0)	SX54	P260	
24	鉢型土器			(15.0)	11.8		P213	
25	片口付鉢型土器				(10.0)		P099	表面に炭化物付着
26	鉢型土器			16.3	16.1	Pit501	P207B	
27	浅鉢型土器			15.4	7.6	SX56	P221	
28	浅鉢型土器			13.1	5.4	Pit230	P036	
29	浅鉢型土器				5.3	SX22	P272	四脚付土器
30	浅鉢型土器			(16.0)	(4.6)		P068	口縁部のみ
31	浅鉢型土器			(14.4)	(8.7)		P209	
32	台付浅鉢型土器			20.7	12.1	SX07	P031.034.069	全面赤色塗布
33	台付鉢型土器			15.6	12.7	SX07	P061	
34	台付浅鉢型土器			(9.0)	(4.1)	SI10	P273	無文、台形に捲蒂有
35	台付浅鉢型土器			(6.0)	(1.1)		P103	内面に雲形文、高台を内削、器底部厚が4mm程度

36	台付土器		(8.9)	(4.4)		Pit一括	P218	台のみ
37	台付土器		(8.9)	(3.7)		Pit066	P249	台のみ
38	台付土器		4.8	(3.7)		ST02		
39	台付土器		(7.9)	(2.7)		SX07	P266	台のみ
40	台付土器		(8.2)	(4.1)		SX20	P264	台のみ
41	台付土器		(8.8)	(3.7)		SX20	P265	台のみ
42	台付土器		(11.4)	(4.1)			P230	台のみ
43	台付土器		(9.7)	(3.0)			P281	
44	台付土器		(8.8)	(3.7)			P284	
45	皿型土器		(20.0)	(2.3)		ST03	P049/050	外面蓄形文
46	皿型土器	245	21.5	8.0		SX07	P58	縦縺にて報告済
47	皿型土器		(19.0)	(5.0)			P063	無文、全面赤色顔料塗布
48	壺型土器		16.0	(14.3)		Pit一括	P216	
49	壺型土器		12.4	(17.5)		Pit001	P012	底部なし
50	壺型土器		19.3	(12.6)		SM11	P075B	
51	壺型土器		(15.8)	(8.6)		ST02	P	頸部から上欠損
52	壺型土器		8.8	9.1		ST02	P021	
53	壺型土器		17.3	22.0		ST02	P022	
54	壺型土器		9.8	(9.7)		ST02	P024A	
55	壺型土器		9.4	10.9		ST02	P035	
56	壺型土器					SX07	P041	大型土器
57	壺型土器		12.4	10.7		SX29	P026	
58	壺型土器		9.9	10.8		SX29	P068	
59	壺型土器		(21.3)	29.4		SX29	P092	
60	壺型土器			(8.8)			P285	口縁部のみ
61	広口壺型土器		(14.8)	(7.2)		SI10	P274	無文
62	注口土器	(5.4)	(4.8)	(2.1)		SD15	P020	口縁部のみ
63	注口土器	(3.1)	(3.6)	(2.5)		SI10	P275	口縁部のみ
64	袖珍土器		4.6	4.2		Pit064	P032	注口土器
65	袖珍土器		(4.0)	(2.9)		SX22	P271	台付土器
66	袖珍土器		4.1	5.5			P034	深鉢型土器、頸部刺突有
67	袖珍土器		3.1	2.2			P098	無鉢壺型土器
68	袖珍土器		2.7	2.4			P102	壺型土器
69	袖珍土器		(5.0)	(2.8)			P223	台付土器
70	袖珍土器		(4.4)	(3.6)			P240	深鉢型土器の底部のみ
71	袖珍土器		(5.0)	(2.6)			P280	台付土器
72	袖珍土器		(8.0)	(4.4)			P283	台付浅鉢型土器
73	土偶	(3.9)	(2.3)	(1.9)		Pit066	P250	面部のみ

74	土偶	(5.4)	4.4	1.3	(23.94)	SX07	P072	頭部欠損
75	土偶	(5.8)	(5.1)	(2.6)	(81.99)	SX22	P269	頭部のみ
76	土偶	(4.2)	(3.6)	(1.4)			P003	頭部のみ
77	土偶	(3.0)	(2.4)	(1.5)			P085	頭部のみ
78	土偶	(3.8)	(2.3)	(1.6)			P210	頭部のみ
79	土偶	(3.4)	(1.5)	(1.5)			P237	頭部(土馬・きのこ型土製品?)
80	土偶	(2.2)	(2.4)	(2.4)			P244	頭部のみ
81	土偶	(1.5)	(0.9)	(0.7)			P278	頭部のみ
82	土偶	(3.3)	(1.1)	(1.2)			P279	頭部のみ
83	耳飾り状土製品		1.7	1.2	SX76	P238		穿孔有
84	円形土製品	3.3	3.4	0.8	SX07	P267		
85	円形土製品	3.1	3.2	0.7			P282	

表2. 出土縄文石器計測表

図版No.	遺物名	法量			重量	出土遺構	遺物番号	特徴
		幅	横	高さ(厚さ)				
86	石鎚	(2.1)	0.9	0.4	(0.67)	Pit.一括	S108	
87	石鎚	5.7	1.9	1.3	10.85	Pit.75	S032	
88	石鎚	(2.3)	(1.7)	(1.4)	(0.14)	SD18	S214	
89	石鎚	(3.1)	1.2	0.4	(0.29)	SD18	S215	
90	石鎚	(2.7)	1.5	0.6	(0.66)	SD60	S103	
91	石鎚	(3.3)	1.3	0.4	(1.28)	SI10	S028	
92	石鎚	3.6	1.3	0.8	1.75	SI10	S029	
93	石鎚	(2.3)	1.3	0.4	(0.88)	SI10	S145	
94	石鎚	2.1	1.5	0.3	1.06	ST03	S205	
95	石鎚	(2.6)	1.5	0.5	(1.45)	SX03	S242	
96	石鎚	(1.5)	(1.1)	(0.3)	(0.34)	SX07	S001	
97	石鎚	(4.0)	1.8	0.4	(1.67)	SX07	S002	
98	石鎚	(2.4)	1.2	0.4	(0.96)	SX07	S005	
99	石鎚	(3.0)	1.6	0.6	(1.92)	SX07	S008	
100	石鎚	(3.3)	1.3	0.7	(2.66)	SX07	S034	
101	石鎚	(3.0)	1.2	0.4	(1.26)	SX29	S019	
102	石鎚	3.3	1.6	0.8	2.50	SX29	S025	
103	石鎚	2.5	1.2	0.3	0.71	SX35	S136	
104	石鎚	4.2	1.3	0.5	2.00	SX60	S116	
105	石鎚	(3.0)	1.1	0.7	(1.58)	SX76	S144	
106	石鎚	3.1	1.3	0.5	1.50	SX76	S150	
107	石鎚	3.9	1.3	0.5	1.82	SX76	S151	

108	石鎚	35	1.4	0.8	196	SX76	S152	
109	石鎚	(3.5)	1.3	0.8	(2.15)	SX76	S153	
110	石鎚	(3.2)	1.5	0.7	(2.18)	SX76	S154	
111	石鎚	(2.5)	1.7	0.5	(1.97)	SX76	S155	
112	石鎚	(4.0)	1.2	0.7	(2.24)	SX76	S157	
113	石鎚	2.8	1.7	0.8	323	SX77	S020	アメリカ式石鎚?
114	石鎚	(3.0)	1.7	0.8	(2.46)	SX77	S139	
115	石鎚	(2.8)	1.1	0.5	(1.29)	SX77	S140	
116	石鎚	(3.4)	1.2	0.5	(1.72)	SX77	S141	
117	石鎚	3.1	1.2	0.8	1.32	SX77	S142	
118	石鎚	(3.1)	1.3	0.8	(2.17)	SX77	S143	
119	石鎚	(3.6)	1.5	0.8	(2.16)	SX77	S146	
120	石鎚	(3.8)	1.2	0.8	(1.82)	SX77	S147	
121	石鎚	(3.9)	1.4	0.8	(2.54)	SX77	S148	
122	石鎚	(2.5)	1.3	0.8	(1.45)	SX77	S149	
123	石鎚	3.8	1.0	0.5	1.70		S013	
124	石鎚	(3.2)	1.6	0.7	(2.08)		S022	
125	石鎚	2.5	1.2	0.8	1.84		S061	
126	石鎚	(4.4)	0.9	0.8	(2.73)		S062	
127	石鎚	3.5	1.2	0.8	1.74		S063	
128	石鎚	(4.0)	1.1	0.8	(2.42)		S068	
129	石鎚	(3.8)	1.7	0.5	(2.18)		S104	
130	石鎚	(2.9)	1.3	0.7	(1.86)		S109	
131	石鎚	(3.3)	1.5	1.1	(0.53)		S113	
132	石鎚	(3.4)	1.6	0.9	(0.13)		S114	
133	石鎚	(2.4)	(1.8)	0.4	(0.97)		S115	
134	石鎚	(3.2)	1.4	0.5	(1.71)		S120	
135	石鎚	3.6	1.1	0.5	1.74		S133	
136	石鎚	(2.6)	1.4	0.5	(1.06)		S156	
137	石鎚	(4.3)	1.4	0.5	(2.17)		S170	
138	石鎚	(2.4)	1.1	0.4	(0.83)		S171	
139	石鎚	(3.7)	1.3	0.7	(2.92)		S174	
140	石鎚	(3.1)	1.4	0.7	(2.37)		S201	
141	石鎚	(2.1)	(2.1)	(0.6)	(2.37)	PtD65	S227	
142	石鎚	(0.0)	2.0	1.1	(0.35)	SD57	S210	
143	石鎚	4.8	2.5	1.3	10.08	SX20	S040	
144	石鎚	6.0	2.3	1.0	10.10	SX20	S043	
145	石鎚	(5.5)	2.7	1.2	(12.21)	SX20	S046	

146	石錐	(2.5)	(0.6)	(0.3)	(0.60)		S048	
147	石錐	(3.2)	(2.7)	(1.4)	(11.57)		S249	
148	石錐	(4.5)	2.8	1.2	(10.31)		S250	
149	石匙	4.8	6.5	0.8	1893	SX71	S111	
150	石匙	5.5	5.4	0.9	1907		S006	
151	石匙	6.7	2.9	0.6	1446		S017	
152	石匙	(3.9)	(4.0)	(1.1)	(12.82)		S159	
153	石匙	3.1	6.2	1.3	1806		S246	
154	石匙	10.0	3.3	1.1	3895		S288	
155	石鏟	4.4	2.8	1.2	1462	S110	S282	
156	石鏟	3.6	2.2	0.9	631		S248	
157	石鏟	6.1	2.5	1.3	1770	SD55	S212	
158	石鏟	6.5	3.0	1.2	2253	SD55	S213	
159	石鏟	4.3	5.4	1.4	3342	SX20	S233	
160	石鏟	4.9	2.8	0.6	787		S064	
161	石鏟	7.6	3.8	1.0	3183		S138	
162	石鏟	(4.6)	3.4	1.3	(21.61)		S245	
163	石鏟	4.7	4.0	1.1	2170		S247	
164	ナイフ形石器	5.5	2.5	1.1	1187	Pv051	S219	
165	ナイフ形石器	4.2	2.4	0.8	786	SD18	S216	
166	ナイフ形石器	4.6	3.1	1.2	1498	ST01	S031	
167	ナイフ形石器	4.6	2.7	1.0	1205	SX07	S283	
168	ナイフ形石器	4.2	2.1	0.9	773	SX20	S259	
169	ナイフ形石器	3.8	2.4	1.0	813	SX30	S039	
170	ナイフ形石器	6.2	2.5	0.4	784		S251	
171	ナイフ形石器	4.6	3.2	1.1	1602		S258	
172	磨製石斧	5.6	2.2	1.0	1928	SD18	S026	
173	磨製石斧	(7.1)	(4.4)	(2.4)	(90.76)	SD52	S211	基部のみ
174	磨製石斧	(10.2)	(5.2)	(2.9)	(271.99)	ST03	S036	
175	磨製石斧	7.7	4.4	2.1	13304	SX20	S045	刃先の摩耗らしい
176	磨製石斧	(8.5)	4.9	(2.8)	(186.42)	SX27	S033	
177	磨製石斧	(8.9)	(4.5)	(2.4)	(108.45)		S007	
178	磨製石斧	11.2	4.6	2.3	195.82		S024	刃部使用痕有
179	磨製石斧	(7.2)	5.9	(2.7)	(176.88)		S119	
180	磨製石斧	(3.2)	4.2	(1.3)	(47.12)		S125	
181	磨製石斧	(7.6)	(5.2)	(3.6)	(194.60)		S160	
182	磨製石斧	6.1	3.1	1.1	3412		S202	
183	磨製石斧	7.2	4.1	1.7	6608		S243	

184	磨製石斧	(13.1)	(4.9)	(2.6)	(223.98)		S244	
185	打製石斧	12.2	5.6	3.3	179.06	SX20	S236	
186	打製石斧	8.5	4.7	2.8	122.62	SX63	S185	
187	打製刃器	6.9	7.4	1.6	52.18	Pit一括	S225	
188	打製刃器	6.4	3.6	1.1	18.72	Pd02	S223	
189	打製刃器	4.4	4.2	0.7	11.78	Pit10	S221	
190	打製刃器	4.4	3.3	1.3	14.70	Pit38	S220	
191	打製刃器	5.6	2.5	1.3	19.82	S056	S291	
192	打製刃器	7.0	10.4	2.1	117.14	SX29	S181	
193	打製刃器	(8.1)	3.8	1.2	(27.19)	SX63	S184	
194	打製刃器	6.2	5.3	1.9	62.85	SX64	S231	
195	打製刃器	8.6	5.8	2.0	80.82	SX67	S186	
196	打製刃器	(4.6)	(3.2)	(0.6)	(10.32)	SX67	S228	
197	打製刃器	5.5	4.2	1.4	27.53	SX71	S112	
198	打製刃器	4.8	7.6	1.1	42.14	低地(沢)	S178	
199	打製刃器	3.8	5.8	1.2	24.08	低地(沢)	S179	
200	打製刃器	4.2	2.0	1.3	7.77		S172	
201	打製刃器	(3.4)	(3.2)	(0.6)	(8.70)		S257	
202	打製刃器	4.8	3.0	0.6	10.63		S260	
203	打製刃器	4.1	3.9	0.9	15.67		S262	
204	打製刃器	5.1	3.4	1.1	11.29		S263	
205	石皿	48.7	38.1	11.4	20100	Pit071	S200	重量は100g未満を四捨五入した。
206	石皿	(19.0)	(15.0)	(7.2)	(1996.91)	Pit316	S021	
207	石皿	(11.0)	(13.0)	(7.0)	(342.96)	SD61	S135	二面に摩耗による深さ40.0 mm程度のくぼみ
208	石皿	(18.0)	(12.0)	(6.5)	(139.80)	SX58	S110	
209	石皿	(17.0)	(8.0)	(10.0)	(360.60)		S118	
210	石皿	(14.5)	(10.5)	(5.5)	(1094.48)		S266	縁無の石皿
211	磨石	11.1	13.6	8.4	1866.92	Pit204	S038	一面が平滑化
212	磨石	9.5	13.5	6.7	1299.71	Pit411	S037	
213	磨石	8.9	12.1	6.0	1031.63	SX29	S183	
214	磨石	8.4	15.2	5.3	944.55		S121	
215	磨石	9.0	11.8	5.7	919.04		S268	
216	磨石	5.9	5.2	4.1	178.83	SX58	S204	
217	たたき石	7.1	7.2	5.6	389.77	PqQ09	S226	一面に穴、深さ3 mm
218	たたき石	9.5	10.3	6.5	714.27	SD18	S030	一面に穴、深さ10.0 mm
219	たたき石	9.4	12.3	5.5	957.02	SX07	S035	二面に穴、深さ2.0 mm, 3.5 mm
220	たたき石	9.4	9.7	3.2	373.66	SX22	S286	二面に穴、深さ6.5 mm, 5.0 mm
221	たたき石	8.7	13.1	5.4	859.41		S270	一面に穴、深さ2.5 mm

222	たたき石	6.7	8.2	4.1	315.61		S271	一面に穴、深さ3.5 mm
223	たたき石	7.1	8.5	5.4	425.96		S272	一面に穴、深さ3.5 mm
224	石棒	(8.7)	(2.6)	(1.6)	(33.36)	Pt(1)15	S012	
225	石棒	(7.0)	(7.7)	(5.1)	(275.00)	Pt(2)16	S059	頭部のみ
226	石棒	(5.6)	(4.3)	(2.4)	(71.22)	Pt(2)16	S057	断面ひし形
227	石棒	(9.5)	(3.3)	(1.8)	(47.84)	SX07	S004	
228	石棒	(8.4)	(1.4)	(0.7)	(8.08)	SX07	S047	断面横円形
229	石棒	(12.3)	(4.4)	(2.7)	(97.06)	SX08	S203	頭部のみ
230	石棒	(9.6)	(3.1)	(1.8)	(85.32)		S051	
231	石棒	(12.1)	(2.4)	(2.2)	(124.66)		S107	
232	石棒	(10.9)	(2.3)	(1.1)	(30.47)		S132	
233	円形石製品	6.2	6.2	1.7	117.65	Pt(4)25	S222	
234	円形石製品	5.8	6.4	2.8	119.78	SD18	S217	
235	円形石製品	7.8	8.4	2.1	166.73	SD18	S218	
236	円形石製品	5.7	6.3	2.0	109.28	SD56	S238	
237	円形石製品	7.6	8.3	4.0	273.39	ST03	S207	
238	円形石製品	8.0	8.2	1.9	165.76	ST03	S208	
239	円形石製品	6.5	6.7	1.7	109.48	SX29	S182	
240	円形石製品	9.4	10.2	4.1	567.92		S273	
241	円形石製品	5.8	6.3	2.8	127.54		S274	
242	円形石製品	6.7	6.7	3.0	207.46		S275	
243	円形石製品	6.8	7.9	2.9	270.77		S276	
244	円形石製品	6.2	6.2	2.2	146.61		S277	
245	円形石製品	5.0	4.9	1.8	61.20		S278	
246	円形石製品	4.8	4.9	1.7	64.47		S279	
247	円形石製品	5.5	6.0	1.7	94.61		S280	
248	円形石製品	6.1	5.9	1.5	81.76		S284	
249	円形石製品	5.1	5.7	1.7	63.68		S285	
250	三角形石製品	5.9	6.1	1.8	100.89		S281	三角形の頂点剥離
251	不明石製品	(8.7)	(5.7)	(1.9)	(36.01)	SI11	S237	
252	不明石製品	11.7	5.5	2.1	219.07	SX20	S009	
253	不明石製品	(7.5)	3.5	0.7	(26.31)		S014	底製薄刃状、使用痕有
254	不明石製品	(1.4)	(2.8)	0.9	(2.35)		S105	
255	不明石製品	(8.7)	4.4	2.3	(96.12)		S256	断面三角形
256	不明石製品	6.2	5.5	4.0	173.50		S269	一面平面、曲面に刻線有

表3. 出土平安時代遺物計測表

図版No.	遺物名	法量			重量	出土遺構	遺物番号	特徴
		幅	横	高さ(厚さ)				
257	須恵器环				SII1	P056		
258	土師器甕		(29.0)	(21.3)	Pt501	P207A		
259	土師器甕				SII1	P041		
260	土師器甕		(12.9)	(8.6)		P203		
261	土師器环			(2.5)	SII1	P268	内墨环、立ち上りに刻文有	
262	土師器环		10.4	6.4		P201	手づくね	
263	土師器环		13.3	6.3		P206	回転糸切り底	
264	土師器环		17.0	6.3	ST02	P024B	手づくね底	

表4. 出土中世以降遺物計測表

図版No.	遺物名	法量			重量	出土遺構	遺物番号	特徴
		幅	横	高さ(厚さ)				
265	青磁蓋(高台部)		62	(2.0)		低地(沢)	P040	見込みに印花有
266	青白磁							内面文様有
267	染付碗							
268	磁鉢							瓦質
269	唐津蓋?							
270	唐津蓋?							
271	磁鉢							越前系か
272	伊万里小碗							
273	伊万里小碗							
274	磁鉢							直尻通宝

表5. SX67土層注記表(図7対応)

1	黒色土 (7.SYR3/2) に灰白色バネス (10YR8/2) を極小粒状に1%含む。
2	褐色褐色土 (7.SYR2/3) に褐色土 (7.SYR4/4) を極小粒~大塊状に30%、黒色土 (7.SYR2/1) を大塊状に10%含む。

表6. SX75土層注記表(図8対応)

1	黒褐色土 (10YR3/2) の単層。
2	黒褐色土 (10YR3/2) にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) を中塊状に5%含む。
3	黒色土 (10YR2/1) の単層。
4	ぶい明黄褐色粘質土 (10YR5/4) の単層。
5	黒色土 (10YR2/1) に褐色粘質土 (10YR4/4) を小塊状に20%含む。
6	黒褐色土 (10YR2/2) に褐色粘質土 (10YR4/4) を小塊状に5%、ぶい明黄褐色粘質土 (10YR5/4) を小塊状に5%含む。
7	黒褐色土 (10YR2/2) に褐色粘質土 (10YR4/4) を小塊状に7%、灰黃褐色粘質土 (10YR6/2) を小塊状に5%、黃褐色粘質土 (10YR5/6) を小塊状に3%含む。
8	黒色土 (10YR2/1) の単層。
9	ぶい黄褐色土 (10YR4/3) に明褐色粘質土 (7.SYR5/8) を少し~中塊状に10%、灰黃色粘質土 (2.SY7/2) を小粒~大塊状に3%含む。

表 7. SMO 2 土層注記表（図 11 対応）

1	黒褐色土 (10YR1/1) に黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小～小粒状に 5%含む。
2	黒褐色土 (5YR2/1) の单層。
3	黒褐色土 (10YR3/2) の单層。

表 8. SM 1 3 土層注記表（図 12 対応）

1	黒褐色土 (10YR2/2) に黄褐色土 (10YR5/6) を極小粒状に 5%含む。
2	暗赤褐色土 (5YR2/6) に黒褐色土 (10YR2/2) を極小粒状に 3%含む。
3	黒褐色土 (10YR2/2) の单層。
4	黒褐色土 (10YR2/2) に褐色土 (10YR4/6) を小～大粒状に 15%含む。
5	褐色土 (10YR4/6) の单層。

表 9. SMO 4 土層注記表（図 13 対応）

1	黒色土 (10YR2/1) の单層。
2	黒褐色土 (10YR2/2) に明黃褐色土 (10YR6/8) を極小～小粒状に 3%含む。

表 10. SX 2 9 土層注記表（図 14 対応）

1	黒色土 (10YR1/7/1) に黄褐色土 (10YR5/8) を極小粒状に 1%、炭化物を極小粒状に 1%含む。しまり強い。
2	黒色土 (10YR1/7/1) に黄褐色土 (10YR5/8) を極小粒状に 1%、炭化物を極小粒状に 1%含む。しまりなく柔らかい。
3	黒色土 (10YR1/7/1) に黄褐色土 (10YR5/8) を小～大粒状に 5%含む。
4	黄褐色土 (10YR5/8) に黑色土 (10YR1/7/1) を薄い層状に 10%含む。

表 11. SX 3 3 土層注記表（図 15 対応）

1	黒褐色土 (10YR2/2) の单層。
---	---------------------

表 12. SX 7 6 土層注記表（図 16 対応）

1	褐色土 (10YR4/4) の单層。
2	黒色土 (10YR2/1) に明黃褐色土 (10YR6/8) を小粒状に 3%含む。

表 13. SX 7 7 土層注記表（図 17 対応）

1	黒褐色土 (10YR2/2) に明褐色土 (7.5YR5/6) を極小～中粒状に 10%含む。
2	黒褐色土 (10YR2/1) に明黃褐色土 (10YR6/8) を小～中粒状に 3%含む。
3	黒褐色土 (10YR2/2) に明黃褐色土 (10YR6/8) を小粒～中微粒に 15%。明黃褐色土 (10YR6/8) を極小～小粒状に 5%含む。
4	黒褐色土 (10YR3/2) に明黃褐色土 (10YR6/8) を極小～中微粒に 40%含む。
5	黒褐色土 (10YR2/2) に明黃褐色土 (10YR6/8) を極小～小粒状に 7%含む。

表 14. SFO 1 土層注記表（図 19 対応）

1	黒褐色土 (10YR2/2) に極小粒状の炭化物が 5%、佛土粒が微量含まれる。非常に柔らかい（もろい）。
2	黒褐色土 (10YR2/2) に黄褐色砂質土 (7.5YR5/8) の極小～小粒を 40%含む。しまり弱い。
3	黄褐色砂質土 (7.5YR5/8) の一部が抜け、赤褐色土 (SYR4/8) になっている。極小～小粒状の黒褐色土 (10YR2/2) が 10%程度含まれる。粘性・しまりがある。

表 15. SMO 7 土層注記表（図 20 対応）

1	黒褐色土 (7.5YR2/2) に橙色砂質土 (7.5YR6/8) の極小粒を 1%、炭化物を極小～小粒状に 10%含む。層面上には炭化物塊が乗っていた。
2	暗赤褐色土 (5YR2/3) に橙色砂質土 (7.5YR6/8) の極小～中粒状に 5%、炭化物を極小～小粒状に 10%含む。
3	黒褐色土 (7.5YR2/2) に橙色砂質土 (7.5YR6/8) の極小～中粒状に 5%、炭化物を極小～大粒状に 15%含む。
4	黒褐色土 (10YR2/1) に橙色砂質土 (7.5YR6/8) を極小～中粒状に 5%、炭化物を極小～小粒状に 10%含む。
5	暗赤褐色土 (7.5YR3/4) に橙色砂質土 (7.5YR6/8) を極小粒状に 30%含む。しまり弱い。

6	黒色土 (7.SYR2/1) に炭化物を極小粒状に 5%含む。
7	褐色土 (10YR4/6) に黒色土 (7.SYR2/1) を 20%、褐色砂質土 (7.SYR6/8) を極小～大粒状に 30%、炭化物を極小～小粒状に 5%含む。
8	黒褐色土 (5YR2/1) に褐色砂質土 (7.SYR6/8) を極小粒状に 3%、炭化物を極小～小粒状に 5%含む。
9	黒褐色土 (10YR2/3) に褐色砂質土 (7.SYR6/8) を極小～中粒状に 10%、炭化物を極小～小粒状に 5%含む。
10	明褐色砂質土 (7.SYR5/8) に黒褐色土 (10YR2/3) を極小粒状に 5%、炭化物を極小粒状に 5%含む。しまりなく重らかい。
11	褐色土 (5YR6/8) の單層。
12	黄褐色細砂 (10YR5/6) の單層。
13	黒褐色土 (5YR2/1) に明褐色砂質土 (7.SYR5/8) を極小～小粒状に 30%含む。

表 16. P i t 7 1 土層注記表 (図 2 1 対応)

1	黒褐色土 (7.SYR2/2) に明黃褐色土 (10YR6/8) を小粒状に 3%、にぶい黃褐色粘土 (10YR4/3) を極大粒状に 1%、炭化物を極小～小粒状に 2%含む。
2	暗褐色土 (10YR3/4) に黄褐色土 (10YR5/6) を極小粒状に 25%、炭化物を極小～小粒状に 1%含む。
3	黒褐色土 (5YR2/2) に明黃褐色土 (10YR6/8) を小粒状に 3%、炭化物を極小～小粒状に 2%含む。
4	明褐色土 (10YR6/8) に黒褐色土 (7.SYR2/2) を極小～小粒状に 1%含む。
5	暗褐色土 (10YR3/4) に黄褐色土 (10YR5/6) を極小～小粒状に 30%、炭化物を極小～小粒状に 1%、小～大粒状に 25%、にぶい黃褐色粘土 (10YR4/3) を中粒状に 2%含む。

表 17. S X 2 4 土層注記表 (図 2 2 対応)

1	黒色土 (7.SYR1/2) に黄褐色土 (10YR7/8) を極小～中粒状に 2%含む。
2	黒色土 (7.SYR1/2) に黄褐色土 (10YR7/8) を極小～大粒状に 30%含む。
3	黄褐色土 (10YR7/8) に黒色土 (7.SYR1/2) を小～大粒状に 5%含む。

表 18. S X 5 6 ・ 5 7 土層注記表 (図 2 3 対応)

1	褐色土 (10YR4/4) に黄褐色砂質土 (10YR8/8) を極小～小粒状に 5%含む。
2	暗褐色土 (10YR3/4) に黄褐色砂質土 (10YR8/8) を極小粒状に 1%、炭化物粒を極小～小粒状に 5%含む。
3	にぶい黄褐色土 (10YR4/3) に黄褐色砂質土 (10YR8/8) を極小～小粒状に 20%、炭化物粒を極小～小粒状に 5%含む、褐色砂土 (7.SYR6/8) を極小～小粒状に 5%含む。
4	褐色土 (7.SYR4/3) に極小～厚い板状の黄褐色砂質土 (10YR8/8) を 10%、炭化物粒を小粒状に 5%、褐色砂土 (7.SYR6/8) を極小～小粒状に 5%含む。
5	暗褐色土 (10YR3/3) に黄褐色砂質土 (10YR8/8) を極小～小粒状に 15%含む。
6	暗褐色土 (10YR3/3) に黄褐色砂質土 (10YR8/8) を極小～小粒状に 1%含む。
7	暗褐色土 (10YR3/3) に黄褐色砂質土 (10YR8/8) を極小～小粒状に 1%、小～大粒の石を 20%含む。
8	暗褐色土 (10YR3/4) に黄褐色砂質土 (10YR8/8) を極小～中粒状に 10%、炭化物粒を極小～小粒状に 1%含む。
9	暗褐色土 (10YR3/3) ににぶい黄褐色土 (10YR5/3) を極小～大粒状に 25%、炭化物粒を小粒状に 5%含む。

表 19. S X 5 9 土層注記表 (図 2 4 対応)

1	黒褐色土 (10YR2/3) に褐色砂質土 (7.SYR5/8) を極小～小粒状に 5%、明赤褐色土 (2.SYR5/8) を極小～小粒状に 1%、炭化物粒を極小～小粒状に 1%含む。
2	黒褐色土 (10YR2/3) に褐色砂質土 (7.SYR5/8) を極小～小粒状に 10%、明赤褐色土 (2.SYR5/8) を極小～小粒状に 5%、炭化物粒を極小～小粒状に 5%含む。
3	黒褐色土 (10YR2/3) と褐色砂質土 (7.SYR5/8) の 5 : 5 の混層。

表 20. S X 6 2 土層注記表 (図 2 5 対応)

1	黒褐色土 (10YR3/2) ににぶい黄褐色砂質土 (10YR7/4) を極小～大粒状に 5%、小～大粒状の炭化物を 2%、鐵土を 1%含む。
2	暗褐色土 (7.SYR2/3) とオリーブ褐色砂質土 (2.SY4/6) の 5 : 5 の混層。
3	明褐色砂質土 (10YR7/8) に淡黃褐色土 (2.SY8/4) を極小～大粒状に 20%含む。

発 挖 調 査 抄 錄

ふりがな	はぐろたいかっこさんいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書 名	羽黒平(3)遺跡発掘調査報告書						
副 書 名	—「美人川再生事業」に係る緊急発掘調査—						
巻 次							
シリーズ名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書						
シリーズ番号	第16集						
執筆者名	木村浩一						
編集機関	浪岡町教育委員会						
所 在 地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稻村 101-1 tel.0172-62-3004						
発行年月日	2005年 3月 31日						
所 収 遺 跡 名	所 在 地	コード	北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
羽黒平(3)遺跡	浪岡町大字 五本松字 羽黒平	0001 229	遺跡番号 290	40° 43' 33"	140° 37' 16"	2,850 m ² 19950626~1130 19960603~1110	公園整備 事業
		種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項	
		散布地	縄文(後・晩) 時代、平安時代	建物跡・溝跡ほか	縄文土器・縄文石 器・土偶・石製品・ 土師器・須恵器 など		

写真1. 調査状況



南端部調査開始時状況（東側から）



遺構精査状況



沢部の調査状況（南側から）



S I 1 0 完掘状況（東側から）



南端部石囲い炉完掘状況（東側から）



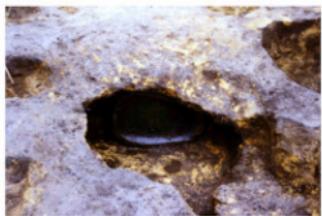
SMO 1 調査状況



SMO 7 調査状況



SM 1 4 調査状況



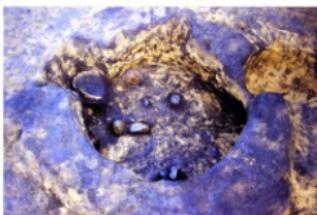
Pit 71 調査状況



Pit 71 石皿 (S200) 出土状況



SX 2.1 調査状況



SX 2.9 調査状況



精査状況 (北側から)



調査完掘状況 (北側から)

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第16集

羽黒平（3）遺跡発掘調査報告書

—「美人川再生事業」に係る緊急発掘調査—

発行年月日 平成17年3月31日

発 行 浪岡町教育委員会

〒038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字船村101-1

TEL 0172-62-3004

FAX 0172-62-8166